

本物の「住まい」が求められる時代



アメニティ

山形県木造住宅活性化協議会

安部 政昭

「住んでよし心ゆたかな木の住まい」

この標語を看板に、全国の木材業の青年有志が「学校の校舎へ木材を、住まいに木材を」と声高く叫び出してから早二十年が過ぎようとしている。毎年十月八日を十と八から「木の日」と定め、木材の全国的なPR活動として、今やすっかり定着してきた。その効果が、全国の所々で木造の校舎が建てられたり、木造の公共建築物ができてきており、木造復権には大きな貢献があったと考えている。

半面、PR活動の力も及ばず、住宅分野では残念ながら、全国的にマンション、プレハブ工法住宅、ツーバイフォー工法住宅がもてはやされ、木のぬくもりが感じられる木造在来型工法の住宅は、大工さん、工務店さん、材木店さんの宣伝下手もあってか、その着工戸数は伸び悩み、今年年間着工戸数五十万戸にも満たない状態となっている。

皮肉にも、戦後日本の山には針葉樹が多く植林され、それが今伐採の時期を迎えようとしている。そのうえ、木材の需要の中で、外

材の占める割合が七五%を超えようとしている現在、国産木材を扱う製材工場や林業家は、総体的な需要の減少と共に、外材との競合にも身を削り、その影響は非常に大きいものとなっている。

その結果、せつかく五十年前に植林された木を、お金に換えて再び植林しようにも商品としては売れないこととなり、製材する工場でも採算割れで利益がでないといったように悪循環に陥ってしまっている。

「山がだめになる!」「山が、林が崩れる!」非常に危惧される事態であるが、頼みの林野庁、営林署はいえ、国産材が売れないということから、営林署の縮小や統廃合が進んで職員数も減少しており、山の作業員も全員撤廃となった。つまり「山のプロたち」がいなくなり、伐採の時期を迎えている林は放置するしかなくなった。間伐もままならず、山は弱る一方である。速やかに伐採して、その後植林することにより、再び若々しい若木が空気中の二酸化炭素を吸収してくれるこ

とになり、根を土の中に大きく伸ばし成長して、土砂崩れを防いでくれることになる。

さて、いわゆる「化石燃料」を原料とする建材で建てられた「住まい」はどのような状況になっているであろうか。

巷では、使われた建材に含まれる揮発性化学物質（ホルムアルデヒド等）が部屋の中に溶解して、子供たちを中心として人体に重大な悪影響を及ぼしており、大きな社会問題となっている。いわゆる「シックハウス症候群」である。木造在来型工法住宅が減少した頃から、さまざまな病気が増加してきたように感じるのは気のせいであろうか。

人間の生活は、時代と共に当然変化してきたわけであるが、ここ二十年の住まいの在り方は自然を離れて大きく変わりすぎたように思える。

また、住宅だけでなく、河川も変わってしまった。流れを曲線から直線に変えてしまい、その結果、プランクトンや小魚の住めない川になってしまった。

Value Sight アメニティ

本物の「住まい」が求められる時代



山、川、海、土、そして人間が、生き物であることを忘れてしまったかのように「価値観」を変えてしまったようである。そして、有機的なものの代わりに、無機質の素材や薬品を多用して、虫も住めない畑や田んぼを作り、そこから収穫される、虫も食わないものを「価値」として「食」としている。

生き物である人間の「巢」としての「住まい」も同様で、無機質素材と、天然資源である木材をも薬漬けにして使用したうえ、さらにもう一つ、「高気密住宅」という魔法瓶のような家に住んでいる。

このように、薬漬けの食べ物や住まいが、我々人間にとってよいはずがない。

現在、前述した「シックハウス症候群」によって、我々にとってかけがえのない子供たちが、まず最初に犠牲になっている。家を建てる際、子供部屋は、最も建築コストを抑えることが多いために、そのほとんどに化石燃

料を原料とした建材を使用することになる。また、畳にしても、いつまでも変色しないようにと薬漬けにしてしまっている。

諸外国では、外で水を飲むときは、その水の「見た目」によらない判断確認が必要である場合が多いと聞く。日本においては、見た目の「きれいか」「汚いか」だけで済む。恵まれた国である。

しかし、近年、高山の自然水からも「リン」などが検出されてきており、見た目のきれいさだけで水が飲める時代でなくなるのは時間の問題であろう。

しかしながら、このところ「価値観」に対して、大きな変化の兆しがみえていることを実感している。

昨年ごろまでは、「本物」がいくら人の手をかけても売れなかった。その代わりに、「風」といった偽物が売れて、安価で効率のよい大量生産の商品が売れてきたのである。

しかし、その流れも来るべき二十一世紀に向けて変わりつつある。あれだけ人工的に手を加えてきた河川にしても、自然の景観を重視しながら、プランクトンや小魚が繁殖できる環境である秒速三十cmの流れにするなどの取り組みもみられるようになった。生活雑貨の廃棄物でいっぱいになった庄内の河口の海底がきれいに戻るかもしれない。山の木が健康で生き生きとなり、川の水も元気となったとき、子供たちもシックハウス症候群から解放されるのではないだろうか。

これからは、本物が売れるのではなく、「本物」が使われてくる時代である。少しばかり高くついても、自然へ帰せるモノを使ってい

である。

家の中に風の通り道を作って、建物自体も健康・丈夫で長持ち、住んでいる人々も健康で長生きできる住まい。これこそ人間本来の「住まい」であるとの考えのもと、この度、山形県内の木造住宅に関心の高い設計、建築、木材の三業種の有志が、「生きている家造ろう」をテーマとして、「山形県木造住宅活性化協議会」を設立した。

山形の住まいには、できるだけ「やまがた」の山の木を利用して、それこそ丈夫で長持ちする、「生きている家」を造るために手を握ったわけである。

遠いところからでなく、身近なところの天然素材である木材や土、紙、鉄などを利用して住まいを造れるようになれば、山を守る「山のプロ」も戻ってくるのではないだろうか。

今からでも遅くはない。一人ひとりが、地域に、環境に、地球にいたわりの心を持って、きれいな空気ときれいな水の国が永遠に続くよう、「本物」を活用していかなければならぬ時期にきていると考える。

安部 政昭

㈱山形城南木材市場 代表取締役
日本燻煙乾燥木材工業会 理事長

平成12年1月、県産材の利用拡大と木材住宅の復権を目的に、設計、木材供給、建築の住宅関連業者で構成する組織、「木の家づくりネットワークやまがた」「山形県木造住宅活性化協議会」が発足、同協議会の専務理事となる。

県内全域を対象とするこうした組織の設立は全国でも初めて。

省エネ、健康「住まい」の啓蒙、普及に取り組んでいる。